

## 存否を問う文における提題の「ハ」・「ッテ」・「φ」

大野 仁美

キーワード：主題・「って」・存否文・発話意図

### 要旨

存否文において主題を提示する「ハ」・「ッテ」・「φ」が若年層においてどのように使分けられている傾向があるかを、予備的アンケートを実施して調査した。その結果、主題で提示される事物を話者が「有る」と見込んでいる場合には「φ」を、「無い」と見込んでいる場合には「ッテ」を最適と選ぶ傾向があることがわかった。

### 1. はじめに

日本語は、機能論的に主題が重要な役割を果たす言語である。主題を提示するには、「ハ」という形態論的な手段を用いるが、口語においては、無助詞（「φ」と呼ぶ）や「ッテ」もひんぱんに用いられている。「ッテ」<sup>1</sup>は本来的に引用標識としての機能を有し、名詞句や節の音形のみを、話者はその意味するところを十分に知らないものとして、あるいは話し手と聞き手との間に共有されていないものとして、提示する（田窪 1989）のに用いられる。たとえば、電話でその場に「山田さん」がいるかと聞かれて「山田さん」を同定できない場合、そこにいる人たちに尋ねるのには、以下の例(2)が自然である。

- (1)? 「山田さん」ハ、いる?
- (2) 「山田さん」ッテ、いる?

一方で、「ッテ」の使用はこれに留まらず、良く知っているはずの事物を提示して、それについて存否を問うたり、あらためて定義し直したりする場合にも用いられる（丹羽 1994）。そのような場合、「ハ」・「φ」ではなく「ッテ」を選択するのは、よりくだけた口語らしいスタイルを用いるという志向が動機になっているのだろうか。それともなにかの話者の発話意図の違いによって選択されているのだろうか。

日本語の若年層話者による助詞「ハ」・「ガ」と「φ」の使用実態について小規模なアンケート調査を 2018 年に実施した際、「ッテ」の使用が、なんらかの理由で「ハ」・「φ」

---

<sup>1</sup> 「ッテ」は、「ト（イウ）」（+「（ノ／コト）ハ」）と置き換え可能な場合もそうでない場合もあるので、本稿ではこれを独自の機能をもつ助詞として扱う。

よりも良いと判断されることを示唆する回答があった。その問いは以下のような形式で、文中には丸カッコ内に入る助詞として「ハ」・「ガ」を例としてあげ、「φ」の可能性にも触れて、さらに自由記述の欄も作成しておいた。

・以下の（ ）には、何かが入りますか、それとも入りませんか？入る場合は、「は」「が」など入るものを記入してください。入らない場合は、「×」を書いてください。可能性が2つ以上あると思う場合は、それをすべて書いてください。

その結果、アンケートで用いた問いのうち、以下の問いに対する回答として、「ッテ」を記入した回答者が合計4名いた（協力者は関東の大学生21名と和歌山県南部の高校生18名の合計39名）。

あなたはバターを買いたいのですが、今品薄であちこちの店で売り切れています。バターを探して店にはいり、店員にそれを伝えてなんと仰いますか？  
あなた：「すみません、バター（ ）ありますか？」  
（もし他により自然な言い方がある場合は書いてください： ）

以下表1は、合計39名による上の問いへの選択回答数である<sup>2</sup>。うち和歌山県方言話者による選択回答数を丸カッコ内に示す。

表1. 「バター（ ）ありますか？」に入る形式

「ハ」	「ガ」	「φ」	「ッテ」
23(10)	0(0)	13(5)	4(3)

「ッテ」を選んだ数は「ハ」・「φ」に比べて少ないが、「ハ」・「ガ」・「φ」が候補として問題文中に提供されていたのに対して、「ッテ」は自由記述で記入されたことを考えると、この場面では「ハ」・「φ」より「ッテ」の方が適していると判断する話者がある程度いることを示唆するものであった。また、この問いで用いているのは、「普段なら「有る」はずのもの（バター）が「無い」と想定される」状況での存否文であった。そこで、そのような状況の設定が「ッテ」の使用傾向と関係があるのか否かがより明確になるように再度アンケートを実施してみることにした。

## 2. 「存否文」アンケートの実施

存否を問う文における「ッテ」の使用は、拡大しつつある「ッテ」の使用（藤村 1993;

<sup>2</sup> 複数選択可なので、選択回答数の合計は、回答者数を上回る。

朴 2006) の中でも本来的で自然であるとされている (丹羽 1994; 佐藤 2011) ので、存否を問う文を用いて「ハ」・「ッテ」・「φ」の使用傾向にどのような違いがあるかをたずねるアンケートを以下のように作成した: 「ハ」・「ッテ」・「φ」をあらかじめ列挙し、それらの使用可能性についてそれぞれ問う形式にする。使用可能性については、「使用可」だけでなく、「不可」も加え、さらに、「最適」と思うものがある場合それをマークできるようにし、回答者の判断をより細分化できるようにする。

存否を問う文が成立するには、当該の事物があるかないかが明確ではない状況が必要なので、輸入品の「チンタオビール」が酒屋においてあるかどうか、また中華料理店でメニューに書かれていない(メニューにあるのであれば、その存否を問うことはしない) 「チンタオビール」があるかどうかを問うという設定で問いを作成した<sup>3</sup>。

回答協力者は、若年層日本語話者 21 名である。作成者の意図は、「ハ」・「ッテ」・「φ」のそれぞれの使用可能性について回答してもらうことであったが、これらの一部だけを選んで回答している協力者が 2 名いた。この 2 名が選んだ回答については、「最適」か「使用可」のどちらかの意味であると判断し、それらの中間に位置づけることにした。問い(1)~(6)の回答を棒グラフで色別に示す (図 1)。先の 2 名の回答は、選択肢「●」として、「最適」と「使用可」の間に入れた。

予想通り、問い(1)~(6)のすべてにおいて、「ハ」・「ッテ」・「φ」のどれもが使用可であると判断する協力者が多い (グラフ中ピンクで示されている部分)。中でも、「ハ」はいずれの状況においても安定して使用可と判断されている<sup>4</sup>。また、どの問いに対しても、これら「ハ」・「ッテ」・「φ」のいずれかが使えないという回答は少ない。つまり、使用が「可か不可か」ということであれば、これらの中に差を見つけることは難しい。

一方で、最適と判断されるかどうかを見ると、「ッテ」と「φ」の使用にはある傾向が見てとれる。これらを「最適」として選んだ回答数は、「φ」が多く(「ッテ」がほぼ無)いパターン(問い(2)と問い(5))と、「ッテ」が多く(「φ」がほぼ無)いパターン(問い(1)・問い(3)・問い(4)・問い(5))の 2 つに分かれる。表 2 では、回答者数の多い順に左から並べて示した。丸カッコは、それを選択した回答者がゼロだったことを示す。

また、アンケートで用いた 6 つの問いで設定した状況は、a) 話者が「チンタオビール」について知っているかどうか、b) 聞き手が「チンタオビール」について知っている(と話者が推測している)かどうか、c) 話者がその場に「チンタオビール」があると見込んでいるかどうか、で異なっている。状況設定にそれが明示されている場合はその有無を、明示されていない場合は「-」で示す。

<sup>3</sup> このアンケート (本稿末尾に付録として収録) は、著者が作成し、楊イ哲氏 (麗澤大学大学院生) と共同で、2019 年に実施した。

<sup>4</sup> 例文に用いた「~ありますか」という丁寧なスタイルに影響を受けて、全体的に「ハ」が使用可と判断された可能性がある。

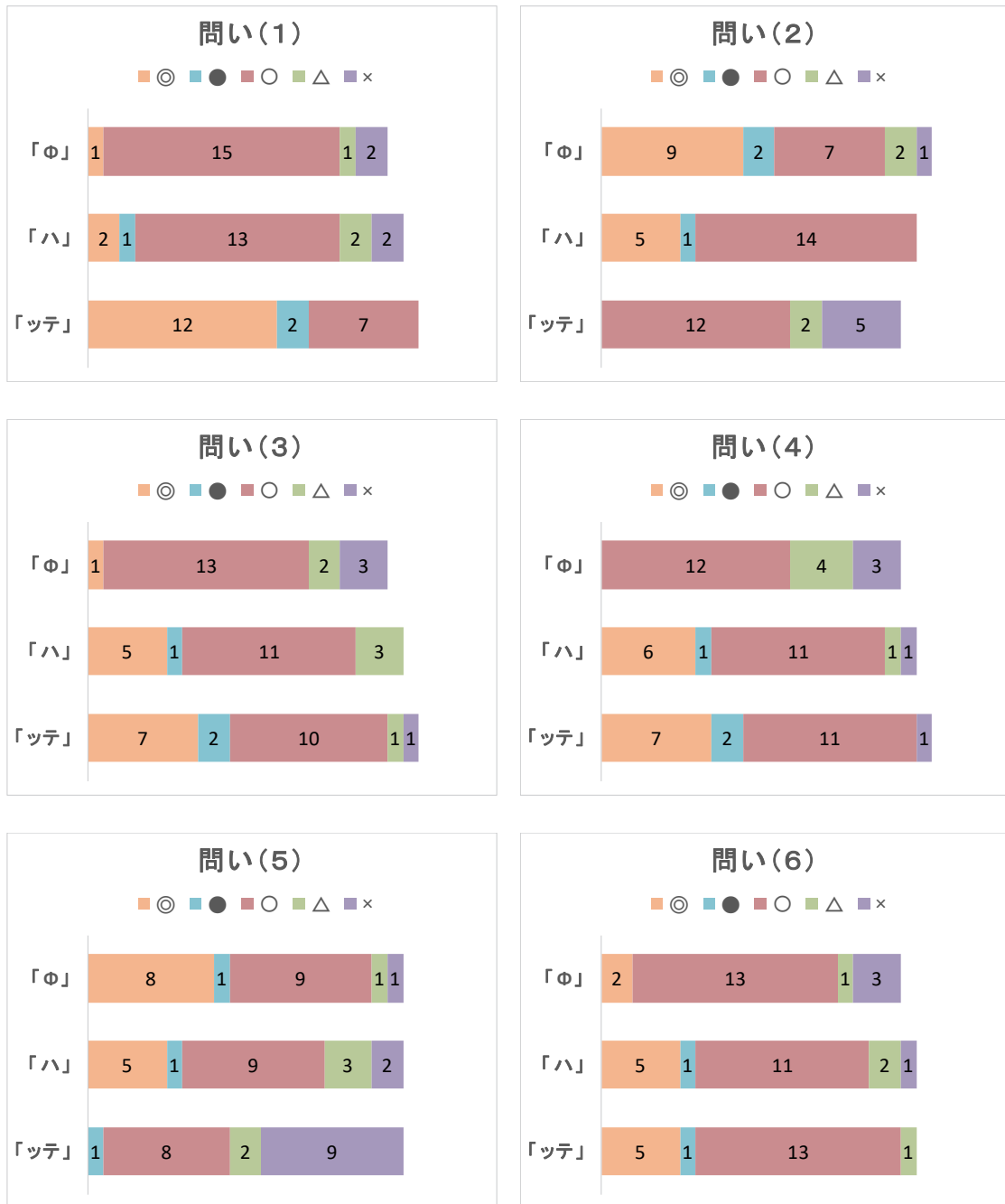


図1. アンケートの問い(1)～問い(6)の選択回答数

表2. アンケート問い(1)~問い(6)において「最適」を選んだ回答者数のパターン

問い番号	a)話者が持つ情報	b)聞き手が持つ情報	c)有るという見込み	「最適」を選んだ回答者数
(1)	無	-	-	「ッテ」 > 「ハ」 > 「φ」
(2)	有	有	有	「φ」 > 「ハ」 > (「ッテ」)
(3)	有	無	無	「ッテ」 > 「ハ」 > 「φ」
(4)	有	-	-	「ッテ」 > 「ハ」 > (「φ」)
(5)	有	有	有	「φ」 > 「ハ」 > (「ッテ」)
(6)	有	有	無	「ッテ」 = 「ハ」 > 「φ」

「φ」を最適と判断する回答が多い問い(2)と問い(5)では、話者は「その対象を知っており、聞き手も知っているであろうと推測し、なおかつ存在すると見込んで」いる。このような状況では、「ッテ」の使用を不可と判断する話者もそれぞれ問い(2)では5名、問い(5)では9名いる。「不可」の判断は、他のケースでは3名以下であることを考えると、これらの数字は多いと言えそうだ。

一方、問い(1)・(3)・(4)・(6)は、「ッテ」を最適と判断する回答が多いパターンである(問い(6)は、最適と判断する数では「ッテ」と「ハ」が同数であるが、「使用可」の判断まで含めると「ッテ」の方が多い)。

そのうち、問い(1)は、問うている話者自身が「チンタオビール」についての知識を持ち合わせていない場合の発話で、「ッテ」がメタ言語的に用いられている本来的・基本的とされる例である。ここでは特に「ッテ」の使用が最適であるという回答が多い。

一方、問い(3)・問い(4)・問い(6)は、話者がチンタオビールについて知っているという点は、問い(2)と問い(5)と同じである。違っているのは、(聞き手がチンタオビールのことを知っていると言者が推測しているかどうかよりも)話者がその存在を否定的にとらえている点である。

この予備的アンケートから存否文における「φ」と「ッテ」の使用傾向としてみられたことは、以下のようにまとめられる。

- (A) 話者が主題として提示される事物を知らない場合 → 「ッテ」を用いる
- (B) 話者が主題として提示される事物を知っている場合
  - (B-1) 話者がその事物を「無い」と予測している場合 → 「ッテ」を用いる
  - (B-2) 話者がその事物を「有る」と予測している場合 → 「φ」を用いる

### 3. 考察とまとめ

今回のアンケートでは、存否を問う文において、話者がその存在をどう見込んでいるかによって「ッテ」か「φ」かを使い分ける傾向があることがわかった。この結果を元に考えると、最初にあげたアンケートで使用した問いの文「バター( )ありますか？」

で「ッテ」を記入した協力者は、「バターはないだろう」という見込みを持って回答したのではないかと考えられる。このような違いは、たとえば例(3)と例(4)では明瞭に感じられないが、例(5)と例(6)のような例であれば、その存否に対する話者の見込みを読みとることができるのではないだろうか。

- (3) 「誰かB型の人っていますか？」(丹羽 1994 で用いられた例)
- (4) 「誰かB型の人、いますか？」
- (5) 「誰か5時までにこれできる人ッテいる？」
- (6) 「誰か5時までにこれできる人、いる？」

同様に、以下の例(7)と例(8)では、はさみがあつて当然の場所、たとえば裁縫や図画工作にとりくんでいる場や家庭においては例(8)は不自然で、例文(7)は自然である。逆に、はさみがあることが想定されない場所ならば、例(8)の方が自然だろう。

- (7) 「はさみ、ある？」
- (8) 「はさみッテ、ある？」

「ッテ」の指示対象が話者にとって「よく知らないもの」として提示されることに関して、佐藤(2011: 17)は、「よく知らないもの」として提示するということは、自分が持っている情報量が少ないことを示すという謙虚さと連続しており、それが実際の情報量より少なく見せる為に用いられている場合は、「同意要求」や「疑問」という文の聞き手への働きかけを「和らげ」る効果につながっていると指摘している。そしてこれらの効果を期待した使用が(本来の意味からは離れて)特に若年層にひろがることを予測している。

今回の存否文に関するアンケート結果からわかったことは、「ッテ」が、対象を良く知らないものとして提示するというだけでなく、その対象を話者が「無いもの」と見なしして存否を問う場合に用いられる傾向があるということであった。これは、話者が単に存否をたずねるのではなく、そのものがあるのであれば利用したいという発話意図を持っている場合には、上記の佐藤(2011)の指摘と同様の効果をもつと考えられる。

たとえば自動販売機で何かを買おうとして、料金を払うのに小銭しか使えないと分かったという状況を考えてみよう。

- (9) 「小銭、ある？」
- (10) 「小銭ッテ、ある？」

手持ちの小銭が無くて、いっしょにいる相手に持ち合わせがあるかどうかたずねる場合、

例(9)よりも例(10)の方が遠慮がちであるように読めるのは、「おそらく持ってないであろう」という想定の上にこの質問がなされている、すなわち「借りることはできない」ことを前提とするからだろう。一方、話者は小銭を持っているが、聞き手が自身の料金を払うためにちゃんと小銭を持ちあわせているかどうかを聞くのであれば、例(10)は「遠慮しすぎ」なのではないだろうか。このように、同じ例文であっても状況・発話意図によって自然さの度合いが異なってくる。

もしこのような発話意図と「ッテ」の使用が関連しているのだとすると、「ッテ」の選択は、口語で用いられるという事実から容易に想定される「丁寧ではないスタイル」で用いる形式であるからというよりは、むしろ、敬語などを用いないことが期待される、敬語を用いると距離を感じさせるような間柄で、丁寧とされる形式を用いることなく、話者の遠慮や言いにくさを表現する為になされているのであり、そのような機能に需要があるから使用が拡大しているのであろう。これは、朴（2006）や佐藤（2011）が、指示対象をぼかすことや持っている情報量を少なく見せることをとりだして「和らげ」と呼んでいる「ッテ」の機能と、同様の平行的なものが存否文における「ッテ」の使用にも見られるということだと考えられる。存否文での使用に発話意図がどのように関わっているか、またさらに存否文以外ではどうなのかについて、引き続き考察を進めていきたい。

## 謝辞

アンケートの実施に協力して下さった麗澤大学生・大学院生のみなさま、熊野高校のみなさま、調査の便宜をはかってく下さった松下一京熊野高校教諭に感謝申し上げます。

本稿は 2017 年度麗澤大学外国語学部特別研究助成をうけておこなった研究の一部である。

## 参考文献

- 佐藤雄一(2011)「引用形式『って』における主題提示用法」『共立国際研究』28: 1-20. 共立女子大学.
- 田窪行則(1989)「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』211-233. くろしお出版.
- 丹羽哲也(1994)「主題提示の『って』と引用」『人文研究』46(2): 27-57. 大阪市立大学文学部.
- 朴序敬(2006)「『って』の許容度 1992年と2003年の調査結果から」『ことばの科学』19: 113-127. 名古屋大学言語文化研究所.
- 藤村逸子(1993)「わからないことば、わからないモノ 『って』の用法をめぐって」『言語文化論集』14(2): 45-56. 名古屋大学言語文化部.

付録 アンケート（回答欄は、問い(2)以降省略）

●以下のそれぞれの選択肢のうち、使用可のものには○、不可のものには×、わからないものについては△を、( )の中に入れて下さい。もし、「これが一番良い」と思うものがある場合は◎を入れて下さい。

あなたは「チンタオ（青島）ビール」を探しています。

(1) 「チンタオビール」がどのようなものか、あなたは知りません。酒屋に行って、店の人に尋ねるとき、どのように尋ねますか？

- (a) チンタオビール、ありますか？ ( )
- (b) チンタオビールは、ありますか？ ( )
- (c) チンタオビールって、ありますか？ ( )
- (d) (他に適切な言い方がある場合は書いて下さい)

(2) あなたはチンタオビールが好きで、時々買っています。久しぶりに買おうと思って、ビールのたくさんおいてある酒屋に入りましたが、探すのがめんどろなので、店の人（ビールには詳しいはずです）に尋ねることにしました。そのときにどのように言いますか？

(3) あなたはチンタオビールが好きで、時々買っています。また買おうと思ったのですが、そのとき近くには小さな酒屋しかありませんでした。あまりビールの種類を置いていないようなので、チンタオビールがあるかどうか店の人（ビールには詳しくなさそうです）に尋ねることにしました。そのときにどのように言いますか？

(4) あなたは中華料理のレストランには行って食事をしようとしています。チンタオビールが好きなので注文しようと思いましたが、メニューには書いていませんでした。それで、お店にあるかどうか尋ねることにしました。そのときにどのように言いますか？

(5) あなたは中華料理のレストランには行って食事をしようとしています。その店は、メニューには書いていませんが、だいたいいつもチンタオビールを置いています。あなたはチンタオビールが好きなので注文しようと思い、今日はお店にあるかどうか尋ねることにしました。そのときにどのように言いますか？

(6) あなたは中華料理のレストランには行って食事をしようとしています。その店は、メニューには書いていませんが、以前チンタオビールを置いていました。しかし最近このビールは品薄で、どこにもおいていません。あなたは、おそらくここにもないだろうと思いましたが、念のためお店にあるかどうか尋ねることにしました。そのときにどのように言いますか？